

# 私の いえ、まち、くらし。

Vol. ①

## 人生95年 私が選んだ終の棲家 （京都・寂庵）

作家・僧侶 瀬戸内寂聴さん

撮影／松岡伸一



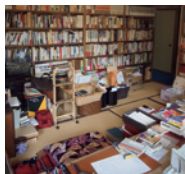
親しい人々が植えた  
庭の木々と暮らす

「曼陀羅山 寂庵」の6畳の書斎で、この原稿を書いている。ここは、本だらけで、猫の足の踏み場もない。

台所に行けば、木々や花々を楽しむ庭が見渡せる。バーの部屋に行けばお酒も楽しめる。ほかに和室、茶室、洋間、客間など7つの部屋がある。44年前に500坪の造成地を購入し、有名建築家に設計をお願いした私の終の棲家だ。思い起こせば、ここに移ってきた当時は、あまりにも広くて寂しくて、しくしくと泣いたものだが、知人友人が庭に木々を引越し祝いに持ってきては、好きな場所に植えてくれた。それが何十年経っても花開く。それらを見るたびに私は彼らを思い出す。もう亡くなってしまう人ばかりだが、彼らの顔が浮かぶ。だからここ「寂



寂聴さんの友人知人が植えた木々が季節ごとに花を咲かせる寂庵の庭（写真提供：瀬戸内寂聴事務所）



「本だらけで足の踏み場もない」6畳の書斎（写真提供：瀬戸内寂聴事務所）

庵」の庭は彼らのお墓でもある。

実は、他人にはあまり話したことがないが、家の基礎に



寂庵を見守る石地藏。寂庵さん作(写真提供:瀬戸内寂聴事務所)

は、般若心経の文字を書き込んだ小石を敷き詰めている。この家を建てるにあたり、私自身が経を唱えながら一個ずつ書いたものだ。ここ寂庵は私の住まいであると同時に、私を取り巻く人々の集いの場、安息の場であるともいえる。

寂庵以外に、京都に2つの住まいを持っている。

一つが2階建ての町家。「羅紗庵<sup>らさあん</sup>」と名付けた。購入した当時はたいそう古かったので「昔ながらの町家」風にするためにリノベーションをした。電球も敢えて「大正時代」のものばかり取り寄せた。2階からは、毎年5月15日に行われる「葵祭り」の行列が目の前に見え、行進中の馬に乗った人と近々と目が合ってしまうほど(ー)。人を招く時には利用する。チベット学者から譲り受けた。



町家を改装した羅紗庵。室内は大正時代の小物で設えた(写真提供:瀬戸内寂聴事務所)

もう一つの住まいは、寂庵の前の畑を横切れば3分で行ける場所にある私の持ち家の中では最も充実した2階建ての家で、私は死ぬ場所としてこの家を手に入れた。2階に書斎を造り、ずいぶん仕事をした。ここからは「寂庵」への人の出入りも見える。こんなに近くに家があるのも不思議だと思われるかもしれない。

### 書くために

### 引越し繰り返し返す

というのも、私は、家を買うのが趣味なのだ。

散歩中に気に入った家があったら、直観で、あまり深く考えずに買ってしまふ。新しい場所を手に入れば、また新しい発想が生まれる。

私にとって、家とは「モノを生み出す場所」。長く同じところにいると、発想や思いが固まる。だから、書くために家を買う。家に求めるのはただ一つ。「ここで作品が書けるか」それだけだ。ただし、そのため年中銀行の借金に迫われ続け、夜も眠らず仕事を続けている。

若い頃は引越しを繰り返した。9回ほどしただろうか。失敗もある。初めて自分のお金で買った練馬の建売住宅は、売れ残り物件ではあったが、思い切つて購入した。だが、一人で住むには広すぎた。

浴室の広さには驚いた。3年ほどで引越したが、いい思い出となっている。

マンション暮らしも思い出される。東京では文京区の「目白台アパート」(現目白台ハウス)や、「本郷ハウス」に住んだ。この本郷ハウス時代に、出家したのだ。家と思いがリンクする。家にまつわる思い出とは、その時に誰が、自分を支え、助けてくれたいたか。彼らなくては、思い出は語れない。

当時は、引越しのたびに交際男性は変わったが(変えるために引越した)、今も家とともに、蘇るのは、私の家から帰つていく当時の男の後ろ姿だ。私が見ていたなどとはつゆ知らず。切なさがかみあげてくる。彼が小さくなるまでずっと見ていたのだ。

「源氏物語」を書くために買ったマンションがあるが、ここはおそらく京都で一番古いマンションだろう。4LDKの造りのしっかりした、川沿いにあるマンションだ。

好きな人と好きな場所で、好きなように暮らしてきた。引越しのたびにその家にふさわしい家具を揃え、自分の空間づくりを徹底してきた。そこがあるから作品が生まれたのだ。

ああ本当に、書いている時が一番楽しい。お気に入りの住まいで書いている時が。私はこれからもずっと書き続けるだろう。生まれ変わっても、ずっと。お気に入りの場所です。



撮影/松岡 伸一

## 作家・僧侶 瀬戸内 寂聴 (せとうち じゃくちよう)

1922年、徳島市生まれ。57年に「女子大生・曲愛玲」で新潮社同人雑誌賞。61年「田村俊子」で田村俊子賞、63年に「夏の終り」で女流文学賞受賞。73年に平泉中尊寺で得度受戒、法名・寂聴。92年「花に問え」で谷崎潤一郎賞、96年に「白道」で芸術選奨文部大臣賞受賞、98年「源氏物語」現代語訳完訳。2001年「場所」で野間文芸賞、06年イタリア国際ノーノ賞、文化勲章受章、07年比叡山禅光坊住職に就任、08年安吾賞受賞。11年に「風景」で泉鏡花文学賞受賞、18年朝日賞受賞。その他の主要作、「美は乱調にあり」「青靑」「比叡」「手毬」「釈迦」「いのち」など多数。



### ちょっとPR

「いのち」(講談社)は、瀬戸内寂聴さんの小説一筋の約70年、濃い愛と憎しみに混じった同業作家との奇やかな友情と鎮魂を告白した傑作中の傑作!昨年12月発売。